

マヨネーズにね  
お醤油を垂らしてね  
そこに七味唐辛子を一つまみ  
それを混ぜるのよ  
ぐるぐると  
死にたくなるほど  
きたない色になるワ  
それにボタンエビをつけて食べるの  
……生きててよかった  
そう思えるのよ

小説  
好きなのは  
ぼたんエビ



作 飛鳥 世一

## 目次

はじめに	1
本編	2

## はじめに

いつも可愛がってやって頂き、本当に有り難うございます。  
心より厚く御礼申し上げます。  
心より感謝申し上げます。

大変に申し訳ありません。

傲轟以降ここからの数作はアップロードが遅れます。

「あゝ……世一は今、こういうものを書いているのだな……」そう眺めてやって頂ければ有難き幸せ。  
適切な時期が来ましたら、アップさせて頂きますので何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

尚、本作はタイトル「小説 人柱」の改訂版となります。

幾つかで悩んでいたのですが、やっと決まりました。

どうやら5月半ばには書き上がりそうです。

アップロードはずれ込むでしょうから、ダウンロードはのんびりして頂ければ良いのでしょうか。  
まったく、ルールに倣うというのもストレスのたまる話でございます。

世一 拝

## 本編

### 草稿版

#### 序の1

随分使い込んでいるのだろう。男の手にする。こうもり<sup>3</sup>の握り手が銅黒（あかぐろ）い。バンブーを撓ませ加工したと思しき取っ手に骨と皮だけになった軀をあずけ、幾分前屈みとなりながら男は一枚の画に鑑入っていた。画はイタリアバロック・ポローニャ派の匠であるクイド・レーニの手によるペートル・チェ・チェンチの肖像だった。男の脚が画の前から離れることは無く、時おり軀を伸ばしては腰に手をあて、さすってみたり叩いてみたりするのだが程なくしては元の姿勢に戻るとまたそれに鑑入る。

それにしてもこの頃の11月の大阪は随分暑く、この日も昼前には館内に設えられたデジタル式の温度計が外気温27℃を表示していた。

2035年11月25日。男は名を松田裕也といった。年齢はこの30日を迎えて満で73歳になるはずだった。が、松田が自らに課した制限と許容、選択は11月29日23時45分。準備が始まる時間まではあと4日と10時間。法的に自由が担保される猶予であり、人権が保障されるタイムリミットである。

運転免許、パスポート、マイナンバーカード、銀行口座、健康保険、各種社会保障制度政策の受給資格、住民票、戸籍。凡てが、選択<sup>4</sup>時間をもつての閉鎖と失効が定められていた。年金は止められ家屋は借りられず、ライフラインの契約も打ち切られ、仕事にもつげず、医者にもかかることはできず。行き場を失い野垂れ死にを選択するか、予め自ら定めた尊厳死を受け入れ国のために尽くした人柱として葬儀を受けるか。道は二つにひとつしか無かった。

※

遡ること8年。2027年の1月の通常国会で一つの法律が可決された。異例の早さだった。それほど緊急を要する案件だったのだろう。法律が可決されると霞が関周辺ではデモ隊による抗議活動が連日繰り広げられ、内閣総辞職を求める声に留まらず暴徒と化す者たちもいた。連日逮捕者の報道や法律の無効を叫ぶ声が電波を通じ流された。日本という国の秩序が綻びはじめた瞬間のようでもあった。

「厚生労働省所管事業社会福祉推進法・尊厳死選択の自由化法案」が可決されていたのである。

2026年春。国の社会保障制度における年金政策が破綻した。政府は国民年金受給者と生活保護をは

じめとする社会福祉事業に関わる制度の抜本的見直しを始めた。「持続可能な社会保障制度検討委員会」がその窓口となった。

しかし、寧ろ見直しは尤前からはじまっていたようだとする識者の論調が世論の声としては支配的だった。「計画倒産と同じではないか」「国会議員の年金を削減せよ」「掛け続けた年金を返せ」「パーティー券を売った財源を国庫に充当せよ」様々な声が国民から上がった。

※

序の2

松田は女のリストカットだらけの手首を見ると「生きすがら」に想いを寄せていた。システムとして人柱にされ、生殺与奪までアルゴリズムで管理されようとする命と自らそれを棄てようと何度も何度も試みる女……

ここに横たわる深くて暗い川。

その昔の小説家が好んで使った言葉「抜けられません」と掲げられているような、地域案内板のような人生。

松田は女に声を掛けるのだった。延長できるかなあと。

「出来るけど……まだできるの。おじいちゃん(笑)」

おしゃべりしようや……松田は自分の人柱に意味を感じようとしていた。

「一緒にご飯をたべよう。何が好きなの？」

「ぎょらん……」

「ぎょらん？」

「いくらよ、イクラ、それもね、プチプチはダメよ……プチプチは川を遡上してきた産卵前の鮭だからね、イクラの皮が固いのよ。汽水域で淡水に躰を慣らしはじめて、定置網や刺し網で獲った鮭のイクラがなまら美味しいのよ」

「じゃあ、イクラ丼食べようか。鮭もあるから、それを焼いて身をほぐしてさ、ご飯に載せて、イクラをのせて……丁度良かったよ。冷凍だけど、一人じゃ食べきれないと思っていたから……うん。シャケニベイビーだな、ハハハハハ」

「シャケニベイビー。何それ……まあいいや、付き合ってあげるわご飯。延長の連絡いれておくわね、何分延長。2時間。だって、40000円ぐらいかかるよ、いいの？」

女はそういうと店に延長連絡をしていた。

松田の脳裏には、リストカットで両手を真っ赤な血に染めたまま「イクラ丼」を掻き込む女の姿が浮かんでいた。

序の5

「すいませーん」瑠美が店の係を呼ぶと、まだ二十歳そこそこの青年だろう注文と思ったものか手端末を手にながら席へとやってくる。

「マヨネーズを少しください」瑠美がそう告げると係の青年はテーブルに並んだオーダー品を一瞥すると「かしこまりました」と告げ、席を後にした。

テーブルの上には、刺身の盛り合わせ、ザンギ、カスベの煮つけなどが並べられていた。どちらかと言えば茶色いものが目立つオーダーだった。五味五色などという言葉があるが、精々が三味三色といったところ。

瑠美は刺身の盛り合わせに盛り込まれた「ぼたんえび」を手にすると器用にエビの頭を外す

「いたっ……」

「どうしたの……」

「ボタンエビの角が刺さったわ」瑠美の指先からは血が出ていた。紙ナプキンを抜き出すと指の出血を止める……、止めながら瑠美はボタンエビの頭を手にとると自分の左腕のリストカットのあとをエビの頭でなぞり始めた。ギコギコと。あのボタンエビのあたまと「鋸」のようなギザギザを使い、リストカットのあとをギコギコとギコギコと軽くこする何度も何度も。次第に腕が赤くなってきた。

松田は何も言わずその光景を眺めていた。何を告げればよいのか分からなかったのである。

「あいよ、マヨネーズおまち」青年が瑠美のオーダーしたマヨネーズをテーブルに置くと、瑠美はエビの頭に吸い付き、ミソをすすり始めた。

「……おいしい……魚卵の他に好きなものはぼたんえび……」瑠美はそう言うのと、啜っていたボタンエビの頭を皿におくと、届けられたマヨネーズに醤油と七味を振り入れる。

「マヨネーズにねお醤油を垂らしてねそこに七味唐辛子をつまみそれを混ぜるのよぐるぐると死にたくなるほどきたない色になるワそれにボタンエビをつけて食べるの……生きてよかったそうおもえるの……」瑠美はそう言いながらマヨネーズをかき混ぜていた。赤と白のマーブルに七味唐辛子のラメが渦巻いていた。

【たしかにきたない色だ……死にたくなるかどうかは分からない……死にたくなる……か】松田は瑠美

の「死にたくなる」という言葉を反芻していた。



---

小説「好きなものはたんえび」

---

著 者 飛鳥世一(辻話人〔フル〕)

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---